修実績は、一人当たり平均手術執刀数が330例、総手術経験数は630例です。3年間の後期研修を終えた先生がたは、主として母校大学の医局に帰っていただいています。実学だけでは外科医の育成には不十分です。若い医師が将来日本の医療界に貢献していただけるよう、われわれが到底お役に立てない役割は専門研究機関である大学に担っていただくのが適切であろうと考えているからです。

旭中央病院は臨床診断や画像所見と病理診断の照合、結びつきを重視しており、剖検数は年間200体、救急患者は1次から3次まで年間60,000人以上をお受けしています。したがって研修医が臨床能力を養うにはもってこいの環境であります。平成23年5月に開院する新本館では、手術室15室とし、ハイブリッド手術にも対応しています。3テスラMRI、320列CTも配備しています。高度医療に対応する体制にあります。当院は、千葉県医療再生プログラムでは千葉大学との連携のもと医師確保推進の拠点、と位置づけられています。千葉県の東端ではありますが、若い先生方が勤務する場所としての魅力は満載といえます。今後とも、学生見学、クリニカルクラークシップ、研修病院として、千葉大学の先生がたのお役に立てればと思っています。よろしくお願いいたします。

国立病院機構千葉医療センター

国立病院機構千葉医療センター副院長
千葉大学医学部臨床教授　杉浦信之（昭54）

当院は昭和20年に旧陸軍病院から厚生省に移管され、国立千葉病院となり、広く一般国民のための医療を提供してきました。千葉では国立といえば当院の代名詞となるごとくであり、大学教授が当院から輩出するなど研究、業績面でも実績を残してきました。平成16年からは独立行政法人国立病院機構に移行し、他の多くの国立病院と同様に医療センターと改名し、独立行政法人国立病院機構千葉医療センターとなりました。そして、歴代院長を含めた職員一同の長年の悲願であった新病院建設が平成22年3月竣工し、6月開院の運びとなりました。病床数は455床と変わりませんが、病床が広くなったことと個室が増えたこと、電子カルテシステムとなったことが大きな変化です。診療科は全部で27であり、医師は常勤、非常勤合わせて109名です。医師のほとんどは千葉大関係です。第一外科出身の心臓血管外科増田政久院長（昭50）、副院長の私（昭54・第一内科）と、統括診療部長・石毛尚起（昭54・脳外科）、臨床研究部長・沼田勉（昭54・頭頸部外科）、手術部長・中村達雄（昭56・麻酔科）、病棟管理部長・永瀬譲史（昭50・整形外科）、外来管理部長・大川玲子（昭47・産婦人科）の各先生方が病院幹部会のメンバーとして個室を使用しています。医長をふくめた同窓の先生はたくさんいらっしゃるので当院ホームページをみていただければ幸いです。

若手医師の育成においては、旧国立病院時代からレジデント制があり、当院から巣立っていった医師のかたがたくさんいらっしゃいます。私の千葉大学時代の恩師である故奥田邦夫名誉教授も国立千葉病院で若き日、勤務していました。平成16年からは臨床研修医制度が始まり、1年間の初期研修医管理型4名、大学との協力型4名、2年で計16名を定員として、当初管理型3名、協力型3名合わせて6名でスタートしました。22年度は研修医制度の一部変更で協力型／小児科の先生が2名、協力型／産婦人科の先生が1名大学より1年目の研修で加わり、2年目の先生と合わせて18名の先生が新病院となり広くなった研修医室で日夜研修に励んでいます。来年度からは管理型の定員が6名となり、研修体制のさらなるレベルアップをめざしています。本年から研修体制の見直しがあり、内科6ヶ月と救急の研修が3か月必修とされています。当院は救急部がない施設のため、1ヶ月間は麻酔科で救急に必要な手技を研修、1ヶ月間は外科で腹部外科救急を中心に研修を受けていただきます。ともに症例は豊富で、各研修医はかなりの経験を積めます。あとの1ヶ月については、これまで7年間行ってきた当直の研修（年間32回程度、平日の夜勤帯または休日の日勤帯）でこれを代替としています。救急患者は21年度で6,252名（救急車3,510件）であり、年間200名以上診ることで、プライマリーケアの研修が可能です。後期臨床研修については、後期研修医の先生は大学の医局より派遣された先生と、国立病院機構としての後期臨床研修医制度（専修医制度）に登録して後期研修を行っている先生といます。まだ、そんなに多くない人数ですので、大学との協力関係を維持しながら後期研修医をたくさん育成していきたいと考えています。

当院は国立病院機構の病院群のひとつであり、千葉県内でも国立関係ということで、千葉東病院、下志津病院、下総精神医療センター、がんセンター東病院、国府台病院、放医研と年2回連合研究会を開催し、密接な関係を維持しています。また、千葉大学とはすぐ近くにありますので、今後も千葉大学附属病院ならびに各医局とは診療面でもさることながら研究面でも協力させていただき、地域医療の充実に努めたいと考えています。

研修医だより

後期研修医より

大学病院での後期研修を始めて

千葉大学医学部附属病院産婦人科後期研修医
笠間美香（平20）

千葉大学を卒業後、2年間の初期研修を他県の民間病院で行い、今年の4月から大学病院の産婦人科に入局しました。後期研修を始めてから初期研修を振り返ってみると、いろいろな科での研修が現在の診療の役に立っていると感じます。私は、初期研修を自分の進む科と関係のある科で研修する良い機会と考えて、必修以外の選択期間では産婦人科を3ヶ月間と短めにする代わりに病理部・皮膚科・糖尿病内科などを選択しました。実際に大学病院で合併症を有する患者さんを診る機会が多く、初期研修で経験した場面に遭遇することもしばしばです。たった数か月の研修でその科の知識や手技を体得できたとは思っていません。けれども、患者さんの状態について把握する一助にはなっていますし、麻酔科や救急科で学んだ薬剤の使い方やバイタルサインの見方についてなどの重要性は産婦人科でも同様です。また、放射線科、病理部など初期研修がなければ研修することがなかったであろう科を経験することができたことはとても有意義で、産婦人科についてより深く知るきっかけになったと思っています。スーパーローテートも過渡期にあり、様々な選択肢ができたことで却って迷っている医学部生も多いと思いますが、従来のスーパーローテート方式でも、専門科は一生なので焦ることはないと思います。

最後に、千葉大学産婦人科の後期研修について触れます。千葉大学産婦人科の後期研修プログラムでは、1年ごとに自分の経験した症例を振り返り、次の年の研修病院を教授と話し合って決めるという合理的な方法がとられています。産婦

人科医スタートの地として、私は大学病院を選択しました。大学病院の魅力は、何といってもスタッフの多さです。産婦人科は産科・婦人科とカバーする領域が広いですが、それぞれの分野の専門家がいて、相談もしやすい環境です。また、カンファレンスが頻繁にあり、アカデミックな雰囲気は市中病院にはあまりみられなかったものです。教育熱心な先生も多く、とても良い医局だと思いますし、産婦人科は大変なこともあるけれどやりがいの大きい科だと感じています。様々な勉強会や講習会も開かれていますので、興味のある方は是非参加してみてください。

腫瘍内科学教室に入局して

船橋中央病院内科　沖元　謙一郎（平19）

私は千葉大学を卒業後、初期臨床研修の2年間を国際医療福祉大学三田病院で過ごしました。三田病院では将来進もうと思っていた消化器内科に同教室出身の先生が内視鏡センター長として勤務されており、基礎から指導して頂きました。そのような出会いもあり後期研修の開始と同時に出身大学である千葉大学の腫瘍内科学教室に入局しました。後期研修の最初の1年間は初期研修と同じ三田病院で研修を継続し、平成22年の4月より半年間の大学病院での勤務がスタートしました。初めての大学病院での勤務に始めは不安もありましたが、指導医の先生方、大学院の先生方から熱心な指導を賜り、また臓器別の分野に偏らず、貴重な症例を数多く経験させて頂き、日々至らない点を自覚しながらも大変充実していた研修であったと思います。超音波検査や上部内視鏡検査の他にも、受け持った症例の検査は上級医の指導のもと自分で施行できますし（CS、ERCP、Angio、肝生検など）カンファレンスに参加し、発表することでMRIやCTの読影、治療方針の考え方などを勉強できました。特定の臓器に偏らず、様々な分野の疾患を受け持ち、検査を担当するというのは当教室の魅力の一つであると思います。外勤などの口も多く生活にも困ることはありません。千葉大出身、他大学出身、先輩、後輩に関わらず、皆仲良くしており、アットホームな良い雰囲気の中で仕事ができると思います。また県内を中心に数多くの関連施設があり、大学の外での研修も充実しています。このような腫瘍内科学教室に少しでも興味のある方は是非一度見学にいらしてください。お待ちしております。

亥鼻祭開催

～千葉大学医・看護・薬学部大学祭～

亥鼻祭実行副委員長兼広報局長　医学部4年　和泉　允基

亥鼻祭が復活して、8年目を迎えました。今年も11月6日・7日に無事開催することが出来ました。穏やかな秋晴れの中、2日間で約2,500人もの方々にご来場頂きました。

今年は金銭的な問題など、様々な要因によって亥鼻祭の開催そのものが危ぶまれておりました。その背景を受け、私達は「ビッグバン」をテーマに活動を展開していくこととしました。「ビッグバン」は宇宙の最初期、非常に高い密度・温度の状態のことです。これをテーマに掲げることで、亥鼻祭が復活した当初の想いを忘れることなく、高い意思・熱意を持って亥鼻祭に向かって爆発していきたい、という願いを込めてみました。

昨年度まで毎年行っていた「お笑い芸人企画」を、今年は行うことが出来ませんでした。他の医療系キャンパスでも頻繁に行われる企画がなくなることで、開催前は来場者数の減少がどれほどのものになるのか、不安を感じずにはいられませんでした。ところが、実際は500人ほどの減少で留まり、亥鼻祭そのものの知名度が上昇したことを肌で感じとる結果となりました。ご来場の方々にも、「毎年楽しみにしているよ」という声も頂き、亥鼻キャンパスが亥鼻祭を通じて地域に浸透するのを実感することができました。

医療系キャンパスという強みを生かし、他の大学祭では真似できない内容を亥鼻祭は展開していると確信しています。来年度は薬学部も亥鼻キャンパスに移動してくるので、更に新しい才能に溢れた大学祭にしていけたらと考えております。まだまだ厳しい状況は続きますが、来年度も開催することが出来るように努力していきたいと思います。

亥鼻祭が年々成長できたのも、ひとえに同窓会の先生方はじめ、大学関係者の皆様のお力添えあったからこそと思っております。この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。また、今後とも亥鼻祭へのご支援のほど、よろしくお願い致します。

（オンライン会報のキャンパス便りで亥鼻祭の紹介が掲載されておりますので、ご覧下さい。）

平成22年度亥鼻祭実行委員会

実行委員長	池田安祐美	（看護学部3年）
副委員長	和泉　允基	（医学部4年）
副委員長	藤平　彩加	（看護学部3年）
財務局長	安田　真人	（医学部4年）
施設局長	大野　友寛	（医学部4年）
企画局長	西村　亘	（看護学部2年）
総務長	森　香子	（医学部4年）
総務	小林　祐介	（医学部2年）
総務	武川　美樹	（看護学部2年）
総務	丸山隼太郎	（医学部2年）